
とーやくんとくらまおにーさんがハンター世界へ

ナナシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とーやくんとくらまおにーさんがハンター世界へ

【Nコード】

N9043S

【作者名】

ナナシ

【あらすじ】

鈴木この野郎！ からタイトル変更しました。 凍矢が

若返りしてハンター世界にとばされて、蔵馬がそれをむかえにいった方がいいが結局帰れなくなり、帰れるようになるまでふたりでハンター世界で暮らす話。 B L要素をふくんでいます。 蔵馬

↑凍矢な超マイナー感たつぷり。 クラピカは女の子です。 オリキャラもでる予定。 ひとつもざくざく死ぬ描写がでる予定

はじめに

この話は、凍矢が赤ちゃんになってハンター世界にトリップしてしまつという、トンデモ設定で書かせていただきます。それを蔵馬が迎えにいくが、諸事情により帰れなくなる、というまたも萌えのご都合主義で書かせていただきます。そしてBL要素が多々にいりまじる予定です。

カップリング要素としては、蔵馬がハンターキャラに受けポジションとしてモテモテ。

でも蔵馬↑凍矢が基本。

クラピカは女性設定で書く予定です。

BLが苦手な方や、クラピカが女性というのは受け付けないかたには、スライディング土下座で謝りたおさせていただきます。お目汚し申し訳ない。

・作品内強さ。

妖狐蔵馬>ジン・フリークス>幼児凍矢

妖狐さんは、メルエムを楽に倒せます。幽白では、トップにはなれませんが、ハンター世界では最強の存在設定でいきます。オーラ量ではジンにまさっているが、リーチの短さで、接近戦にもちこまれると凍矢はジンに負ける、とう設定でいきます。

・時期

幽白原作から100年後

ハンターは原作開始十年前

・鈴木

都合がわるくなったら、全部鈴木 of せいである予定です。
鈴木が一晩でやってくれました。

いっはぎい？

うわん、うわんと、赤子が泣く聲がきこえる。

これは、おれの怒り。

ことばにならないおれの感情が、赤子の泣き声として響き渡る。

深い森の、奥の、奥。光すらささない、鬱蒼とした木々の下。濃く色づくみどりが黒く影を落とすやわらかな土の上に、おれはうまれた姿のままほうりだされた。

ここは、すごしなれた魔界であろうか？

おれは自問するが、すぐに『違う』と答えは出た。

あまりにも肌になれた、肺をおおいつかさばかりの禍々しい魔界の空気とは違う、木々の臭気がまじった人間界の空気だ。

風のとおりがわるく、じつとりと澱んだ重苦しい空気であつたが、魔界のそれとくらべれば、ひじょうにすがしい。

じぶんの状況を把握しようと、手足をうごかす。ばたばたと動くだけで、たちあがるどころか、上体をおきあがらせることすらむずかしい。

——あかごだ。ことばだけではなく、からだのじゆうすらない。

ぼんやりとした視界にはいるじぶんの手は、ちいさい。足も。なにかの人形のようにちいさくそろった手足の指は、到底、おれのものには見えなかった。

手をうごかしていると、水滴のついた草にふれた。

素肌がぬれる。

手をぬらした滴が、皮膚を伝い、土におちる。

意味もなく、それをぼんやりと感じて、ああ、そういえば背中の腐葉土の感触がきもちわるいな、ともやでもかかったかのような頭でおもつ。

曖昧でかすんだ視界にひきずられるように、思考すらもぼやけてしらく滲むようだった。

体に引き摺られて、こころすら赤子に戻ってしまっている感覚に、ぞくりといやなものが全身を走った。

うわん、うわん。

随分と、久しぶりの『恐怖』という肌があわだつ代物に、おれは本能のまま泣き叫んでいた。

なんだこれは。自制のきかぬ、感情のままの行動。これではまるで、本当に赤子ではないか。

片隅に残った理性がつぶやくのとは逆に、抜け出ることのない無間地獄の如く、肉体から思考が乖離していく恐怖が、おれを感情のまま泣かせる。

それは森の梢をふるわせ、ざわめかせる。

木々の隙間を裂くようにとおくまで響く聲は、森の住民の耳に届いたのだろう。

ぎちぎち、と奇妙で凶暴な生き物のこえが、おれを囲む。

突然にあらわれた珍客であるおれを、恰好の獲物として歓迎しているらしい。

殺意と歓喜をふくんだけものの気配が、輪となってじわじわとおれに近付いてくる。

おれは、そのときはじめて嗤った。

わけもわからぬ場所に飛ばされ、ままならぬ体に憤り、恐怖し、泣き叫ぶしかできなかったあかごのおれは、恐れを知らぬけものたちの哀れさに、わらいがこみあげてきてしかたなかった。

おまえたちが、餌にしようとしているのは、おまえたちよりも冷たく鋭い牙をもつ、いきものなのだ。

やわらかく無力にしか見えないいきものであると、その本質を見破れないとは、けものの野生の勘というのは、案外鈍いものだ。

おれを、その脆い牙や爪で食い破ろうというのは、傲慢であり、あさはかだ。

後悔させてやろう。

いや、後悔できるだけの時間も、おのれが死んだという自覚の時

間も、あたえられぬまま、殺してしまうだろう。

一瞬だ。

鍛え上げた筋肉がつかいものにならなくても、宿る妖気は以前とかわらぬままにある。

圧倒的な力をふるうと意識するだけは、それは凍りつき、凶器となす。

ふるおうとした力は——しかし、形にならなかった。

失敗した訳ではない。赤子の姿になっても、妖気を自分の意のままに動かす自信はあった。

おのれの意思で、止めたのである。

ひとの気配が、あった。

近づいてきているのではない。

既に、近くに、あった。

おれには『ひとの気配がちかづいてきている』と感じ取れる速度であったが、けものたちにとっては一瞬だっただろう。そうと判断できる速度で、ひとの気配が近くにきた。

人間の、一般的に認知されている瞬間的最高速度は、秒速何メートルであったか、とおれはのったりと考える。一般的な人間の常識を凌駕した俊足であった。

おれのなかで、強者とみとめる人間は、玄海師範と桑原である。そのふたりをはるかにこえる動きだ。

それを感じとり、俺は素直におどろく。

人間のなかで、桑原と玄海師範はかなり強い。

それを超えると、相当なものだ。

おれが知らないだけで、人間にも、つよいものはいるのだな。

常におのれを研鑽することを忘れぬ、戦うものであることをひしひしと感じ取れる。

途中でちからをふるうのをやめたのは、常人ではできぬ動きをする人間に、おれが人外の力をもつものだとしめて、警戒をいだかせるのはよくないと考えたからだ。

ひとの近くで力を行使し、自分の力を知られるのは避けたほうがいい。

魔界の存在を、徐々に人間界の住人に周知されるようにしているとはいえ、突然わけのわからぬ力を見せるのは躊躇いがある。それに、おれのちからを脅威と取り、おれを殺そうとするのを避けたい。今のおれのからだは、妖気をつかって攻撃できても、手足をつかって逃げることはできない。もし、人間がおれを攻撃してきたら、おれはじぶんを守るために、反撃せざるをえなくなる。

なにより、おれが力を行使しなくても、この気配の持ち主はけものを全て屠るであろう。

けものの断末魔の悲鳴が、けもののかたくごわついた皮膚を易々と裂く音が、血しぶきの音が、消えていくけものの命の気配が、それをおれに教えてくれる。

——おれが、ちからをつかうまでもない。

体のなかで臨戦態勢にはいつていた妖気を、解く。鋭くこわばった妖気がふわりと溶け、体内に循環する感覚。

殲滅は、またたきの間で終わっていた。

「あー」

感心の声をあげたら、何処かうたうような、間の抜けた声が出た。誰かをよぶ、甘ったれた赤子の呼び声にも聞こえた。

奇妙なほど音をたてずに、けものを屠ったものは草木をかきわけ、おれのもとへきた。

「まさかとおもったけど、こんなところに捨て子か？」

珍獣でも見るような目を向けた男が、興味津々におれをみる。

男の顔に、おれはくるりと目をまるめる。

「うー」

顔立ちがごとく幽助に似ていたからだ。ひとをひきつける包容力のある雰囲気や、陰りなく輝く目。

強さは、幽助が段違いに上だが。

「秘境のどまんなかに、わざわざ捨てにくる馬鹿なんていないと思うが」

男のことばに、おれがほうりだされたのは人間がそうそう訪れない場所であることがわかった。

そんな所に、あかごがいたら驚くだろう。

いぶかしみながらも、幽助に似た男は、おれを警戒心無くだきあげる。

「よお。こんなところに捨てられるなんて、可哀想にな」

口ぶりとは裏腹に、すたられたと思っているおれに同情するそぶりはひとかけらもない。まあ、同情されたいわけではないので、別にどうでもいいのだが。

男はおれの背についた土をはらった。

きもちのわるい腐葉土の感触からようやく解放されたおれは、自然とえみをうかべていた。

顔面の神経が硬直しているのはあかごにもどつてもかわらないのか、こどもらしい満面の笑みにはならなかった。

「あー」

ありがとと、礼をつけたいのだがやはりことばにならない。

男は笑みを返してくれたので、なんとなく、は伝わったのかもしれない。

「しかし、こんなところに捨てられるなんてなあ。もしかしてお前、人間じゃなくて魔獣のこどもか？」

冗談半分で言っているのだろうが、おれは男のことばにしばし考える。

魔獣、ということばは初めてきいた。しかし、意味合い的には“妖怪”と同じなのだとおもった。

生活圏の違いで、ことばの違いというのはある。おれはそう納得した。

会って数分で事実を看破するとは、かなり鋭いおとこだ。さきほどの実力とあわせてかんがえるに、油断できない。

しかし、おれのなかでは、ある予感がある。

この男は、たとえおれが人間ではないと知っても、態度を翻しておれを攻撃してこないだろう、という予感だ。

ただの、根拠のない勘にすぎないが。
はたと気づく。

——おれはこんなかんに、たにんをしんじられるやつだったか？
ひとめで、たったの一瞬で、相対するものの信頼を勝ち取る屈託のない男の存在感にのまれているじぶんを自覚して、おれは動揺する。

——用心するにこしたことはない。妖気をみせるような真似はぜったいにしてはならない。

おれは、そう言い聞かせた。

いっはぎいっ。(後書き)

まずはジンさんにひろわれます。

いっはぎっ？ 2（前書き）

わけてかいてみましたが、1と2はおんなじページにまとめてしま
ってもよかったような……

もしかしたらいずれ、まとめてしまつかもしれません

いっはぎい？ 2

男はおれを腕にかかえながら、風を切る速さで森中を探索してまわっていた。

「こいつの親は、何処にいったんだ、……まったく」

科白からして、おれをすてた親をさがしているらしい。

どれだけ必死にさがしたところで、みつからないもののために男を駆け回らせていることに、申し訳なさがつる。

それを教えることはできず、おれはちいさくすまないとこころの中で謝った。

「こいつがあらわれたのは、誰もいないところで、ついさつき、突然に、だ。……もしかして、念能力者のなにかの能力か？」

そうとしか考えられねえなあ。

推測を口にする男の声は、どこか楽しげだった。

じぶんのしらない、『未知』の力に興味をしめしている。

能力者、というと魔界の濃い空気にあてられて力を顕現させてしまつものを、おれはおもいうかべる。

だが、男のいう念能力者とやらは、受動的に、そして限定的に力を手に入れるようなものとはちがうきがした。

たとえば、おれの知るもののなかでは、“霊能力者”というのがそれとちかいきとする。

自身の肉体に研鑽をかさね、才能を磨き、おれのなかにある霊気をあやつることで爆発的な攻撃能力や特殊能力を得る。男はまさに、それなのだ。力強い霊気が全身をつつんでいるのがわかる。さきほどの身体能力といい、体をおおうように纏った霊気といい、能力者に関する知識といい、これを一般人とみるのは難しい。

憶測をかさねるならば、男もまた“念能力者”とやらなのだろう。おれは霊能力者、といったくなるが。

さきほどの“魔獣”ということばもそうだが、おれがしばらく人

間界に足をふみいれない間に、名称がかわったのかもしれない。それに關して、ぶじに魔界に戻れたら調べたほうがいいだろうな。

そして、男の発言の前後から考えると、誰かを突然違う場所にとばすこともできる能力もある、とおもいつく。じっさい、おれは鈴木之死出の羽衣による力でここに飛ばされてしまったわけだ。

男が断片的にもらす情報だけでは正確なことはわからないが、この男はふつうの男とは違う、それだけははっきりとわかった。

——このすがたでは、いまはこのおとこにたよるしかない。

だが、油断はしてならない。

この男が、魔界の存在を知っていて、なおかつ魔界の住人に対して友好的な思考をもっている、と。それを確かめるまでは、ただのあかこのふりをしていなければ。

おれはしずかな決意をかためた。

男は走りまわって森のなかを探して回るのを無駄と悟り、速度をおとしゆっくりと歩き始めた。

今まで皮膚にあたっていた塊のような強い風がとたんに止む。男があゆむ一定のリズムでゆれる居心地のよさがうまれた。

男が一步一步、歩をすすめるたびに、おれのからだは鉛のようにおもいものにつつまれる。気だるさは本来嫌なものはずなのに、今、おれのからだをつつものは、逆らえない魔力を持っていた。

「なんつーか。最近の俺は、餓鬼に縁があるな」

ひくくつぶやく男の声が森のなかにこちよくとけていく。それは子守唄のようにおれのおぼろげな意識に届いて、おれをあがらないしあわせな眠りに導こうとしている。

おれはひどく眠かった。

警戒と用心の緊張がごとくほどけて消えうせる。思考がばらばらになって、じぶんがじぶんであることを忘れてしまう感覚。

とろとろとしたものに、目をあけているのがとても難しくなるのだ。

「うー」

夢の世界がおれを手招いている。理性は、ちゃんと起きていて周囲の状況を把握しなければ、と告げるのだが、目を開けつつけようとする努力もむなしく、瞼はくつついてしまう。

裸のままでは具合が悪いだろう、とおれは男の上着につつまれて男のうでにしつかりとだきしめられていた。片腕でかると支えられるちいさく非力なからだになってしまったおれは、大人しくそれに身をあずけるしかない。

本来ならば居心地の悪いはずのそれは、とても気持ちがよくて、おれは残った理性の切れ端でとまどっていた。

不可抗力とはいえ、だれかに体をあずけるのははじめてかもしれない。

とおい、とおい。記憶にのこらない、おれが本当の赤子だったころ、もしかしたらこうやって親に抱きあげられていたのかもしれないけれど。

全身がつつまれるように守られている安心感に、あかごととしての本能がおれを眠りにいざなう。理性など金槌でこなごなにくだかたていどにしかのこっておらず、おれは本能にあがらえない。

さつきまで、じぶんがじぶんでなくなる恐怖に泣きわめいていたというのに、その恐怖を上回る安堵感につつまれてだらしくまどろんでいる。

そんなじぶんを、ゆるせないはずなのに、いやじゃない。

——ああ、あたたかいな。

じぶん以外のあたたかさなど、ひさしく忘れていたものだった。氷を手繰るおれの肌は、極限にまでさがった温度をあたりまえのようにうけいれることができるが、だからといって、凍える寒さを好むわけではないのだ。

——あたたかい……

もし、おれに父というものがいたのならば、こうやってまどろんでいた過去があったのだろうか。

そんなことをおもいながら、最後にのこっていた、ほんの一握り

の思考すら手放した。

夢の中で（前書き）

おれさまの

つくったものは

みなださく

いづれ書きなおしたいです。はい

夢の中で

おはよう、陣。今日は変な夢を見てしまった。

どんな夢だったかって？

そうだな、はじまりはずいぶんと最悪だった。

おみくじをひいたら、必ず大凶がでるだろう。そとを歩いたら、黒猫が目の前をよぎるにちがいない。スニーカーを履いたら紐がぶつりと切れる。何もないところで転ぶ失態を犯し、突然なにかが飛んできて頭にぶつかる。

きつと、そんな地味な不幸がじわりじわりと責めてくる、とてつもなくついていない日なのだ。

夢の中の俺は、そう思っていた。

笑うな、陣。仕方ない。夢の中の俺は、本当についていなかったんだ。

どんな風についていなかったのだった？

そうだな。一から話そうか。

夢の中では、俺は癌陀羅にいた。それが不幸の始まりだったんだ。元忍の肩書きのせいで、俺が間諜まがいのことをさせられているのは、陣も知っているだろう？

主に戦忍として教育されたから、間諜としての仕事は本業ではないのだが、どうも仕事がまわされるのだ。

黄泉のところの諜報機関が育てている間諜とは違う、忍としての専門技術に期待しているらしい。

目立たないように周囲に溶け込んで情報収集が苦手なお前と違って、一応、俺はそれなりに成果をあげているからな。使われることが多い。

一言多い？ そうか？

夢の中の俺は、黄泉の臨時の部下として働き、癌陀羅に報告しにいていた。それは現実世界でも変わらないな。パソコンで書類をま

とめるのは、慣れてきたとはいえ未だに面倒なところがあると、常々思う。

本当に、なぜ黄泉の元で働いているんだろうか。

元黄泉の部下であった経緯があつたせいなのか、はたまた俺の性格上“今の”黄泉ならば軋轢もそう起らないと判断されたからなのか。

昔から、黄泉の部下が情報収集能力に優れているから、魔界統一後も、それをそのまま流用しているだけなのだろうが、そこに俺が手伝わされる理由が未だによくわからない。

歴代の大統領は、俺を元スパイと勘違いしていないだろうか、とたまに本気で思う。俺の忍としての仕事は、ひらたくいえば、傭兵だったんだが。

……話が脱線したな。魔界の情報収集事情など、この際関係のないことだ。

そう、俺が癌陀羅にいたときに、丁度鈴木も癌陀羅にいたんだ。

というか、鈴木は癌陀羅市街の一角に研究室をかまえて住んでいるから、俺よりもあいつは癌陀羅にいる確立は高いだろう。修行以外の時間は、あいつは変な研究にあてているからな。

それで、だ。鈴木は癌陀羅にある自分の研究室ではなく、黄泉の城にある下級兵士や役人が使う食堂に居たんだ。

食事をしていたわけではなく、裏方にひっそりと。

夢の中の俺は、それに気付かなかつた。

俺が癌陀羅に出向いて黄泉への報告を終えたとき、昼時より少し前で、件の食堂の席はまばらにしかすわっていないくて、空いていた。

これから黄泉の城を出て、外にあるどれかの店にはいつでも込み合うところに行くだけだろうと考え、俺はすいているうちに城の食堂を使うことにしたんだ。

希望すれば上級士官が使う食堂を使える地位にはついていたが、ひとりで食べる食事の質など、高くても意味がないものだからな。栄養がきちんとならなければいいと考えたんだ。それが大きな失敗だった。

たのだろう。

俺はそこで食事をとった。

異変は直後に起こった。

体が異様に熱くなったよ。

高位の氷系に属する妖怪の俺は、外部からくる多少の熱なら平気だが、内側の熱には弱いのだと思い知らされた。座っているだけなのに体がだるかった。人間のいう、風邪というのはああいう状態なのだろう。眩暈がして、目の前が白く霞んだ。吐き気がして、喉の奥が苦しかった。頭痛がして、脈拍するたびに鈍器で殴られているようだった。

最初は毒でもはいつているかと思った。自分の身よりもテロや愉快犯の可能性を心配した。食中毒にしても即効性のありすぎる効果だったから。

忍時代に毒に慣らされた体の俺が、こんなにも苦しむのだ。下級兵士や役人たちのように妖力値が低いものではひとたまりがないだろう、と瞬時に考えた。

厨房のものたちに即刻食事をさげさせるよう命じようとした。萎える足で必死に立ち上った。

俺の様子に気付いて、調理人の恰好をした男が、慌てて大丈夫かと声をかけられてきた。

——あの瞬間、非常事態を告げようとした口が、空いたまま固まったよ。あんなに間抜けな顔をするなんて、多分、この先そうはないだろうという顔になったな。

そして、

『ついてなかったな、あんた。それ、鈴木さんの作った薬のはいった“あたり”だぜ』

と言われたんだ。

そのときの俺の怒りが、想像できるか？ 陣。

気分の悪さも、体の熱も吹き飛んで、どういうことだ、と問いたただした。目の前の男は、俺の時に恐れをなしてたじろいでいたよ。

男がいうには、鈴木は癌陀羅の食堂で、公然と人体実験を繰り返していたらしい。人体に有害ではないもの、という条件で黄泉にも許可をもらって行っていたそうだ。

食堂を使うものたちも、一日のある種の運だめしとして楽しんでみたんだな。

耳やしつぽが生えたり、性別が逆転してしまったり、今までもいろいろとあったらしい。今日、犠牲になるのは誰か、とか。今日は自分じゃなくてよかった、とか。

薬はランダムに食事に混ぜられて、俺は運悪くそれをひいてしまったのだ。とんだとばっちりだ。

俺が口にしてしまったのは、若返り効果のある薬だった。

ほとんど体が縮んでいった。

鈴木は、俺が薬のはいつた食事を口にしたのを見た時点で、食堂から逃げたと男に教えられた。

俺の逆襲を恐れたのだろうな。もちろん、すぐに追いかけたさ。だが、縮む体が自分のものではないようない思うように動かないで、見失ってしまった。

走りながら、下衣が下着と一緒にずりおちてしまいそうで、おさえつけておくの大変だった。夢の中とはいえ、裸になんかなりたくなかったからな。

とにかく思いつく場所を探してまわろうと、まず、鈴木の研究室に向かったんだ。

走る最中も、縮むのは止まらなかった。どんどんと小さくなり、鍛えた体が弱体化していくのがわかった。靴は途中で脱げて、裸足になっていた。上着は肩からずり落ちてかなりだらしない恰好になっていた。

そして、ようやく鈴木の研究室にたどりつき、ドアを開け放った。
——そうしたら。

鍵を壊し、乱暴に扉をあけはなった衝撃で、散乱する研究室にあった荷物。

そのなかのひとつに、かつて鈴木が死々若丸にあたえた、死出の羽衣があった。

ふわり、と舞い飛び、小さくなった凍矢の頭上までおちる。

うつくしい羽衣の色が幼い凍矢の目に見えた瞬間、

歪む視界、ねじるように体がなにかにのみこまれていく。

——死出の羽衣は、羽衣をつつんだ対象を別の次元にとばしてしま
う力がある。その行き先は、誰にもわからない。そう、羽衣を作っ
た鈴木にすら。

おれは、陣にはなしの続きをしようとした。そして、おのれの口
からでる声がおかしいことに気付いた。

おれは泣き聲をあげながら、ことばにならない叫びをあげる。

——こっちがげんじつなのか！

じんとかいと（前書き）

わからない

どうしてこんな

ださくなの？

書きなおすべきなのでしょうが、どう書きなおすべきなのかがわからない。

じんとかいと

目を覚まして、その後しばらく意識がはつきりするまでに時間がかかった。頭の奥がぼんやりとしていて、油断をするとまた眠りにおちそうだった。

おれは眠気をなんとかふりはらい、現状把握をするべく、周囲をみわたした。はっきりとしないぼやけた景色しか見えず、体と首がうまく動かないのでそのぼやけた景色すら、一部しか見えない。見えるものも、鼻をつくにおいも、さきほどと変わらない。おれはまだ森の中にいるのだ。

けれども、眠りに落ちた時と違うことがひとつ。

俺は男の腕ではなく、地面に草を敷き詰めてその上に布を敷いた簡易のベットに横たわっていたことだろう

「あ、ジンさん。赤ちゃんが目をさしましたよ」

目をさまして、真実の無慈悲さにどつぷりと絶望にひたりそうになった途端、少年ぐらいの年頃のかかるい声が聞こえた。

声がしたほうを向くと、ちいさないきものにたいする興味と好意があけすけな笑みを浮かべる少年が、おれに手をのばしてきた。

少年の手はやわらかくおれの頭をなでた。

「かわいいなあ」

整った顔を笑みでくずして、おれをなでている。

元の姿のおれならば、屈辱と取れる行為だが、あかこのおれはなでられる感触がいやではない。むしろ、きもちよくて、笑みがこぼれる。

「あ、笑った。そうか、お前、撫でられるのが好きか」

嬉しそうにいつて、飽きずに俺をなでる。

ふわふわととけるような夢心地に、また瞼が重くなるうとしていく。

鈴木につくった薬は、もしかして体だけではなく、ここまで退化

させる効果があるのかもしれない。

そんなことをとりとめもなく思っていると、男は冗談めかして笑う。

「カイト、一応気をつけておけ。もしかしたら猛獣の突然変異かもしれないからな」

男のことばに、少年はびっくりして手をひっこめた。

突然いなくなってしまった掌のあたたかさに、おれは反射的にむずがりはじめていた。

「うっ、あうっ」

おのれの口から出ているとは到底信じられない、脆弱さと女々しさを帯びた声だ。二百年の年月をいきた妖怪のものとはとても思えない。そんな反応をしてしまったのが、余計に悔しくしてみっともない自分が恥ずかしくて、ついに堰を切った感情に火が付き、森にほうりだされたときと同じように、聲をおおきく泣き始めてしまった。「ジンさん。びっくりさせないでください。この子の何処が猛獣なんですか。どこにでもいる赤ちゃんじゃないですか」

……いや、男のことばはあたらずともとおからずだ。見た目にだまされるのは、とてもきけんだぞ。

魔界では、見た目が柔弱だからといって、ゆだんできないいきものがたくさんいる。

だが反論できない。今のじぶんのからだは恨めしい。

“かいと”とよばれた少年は口をとがらせて男を責めて、少年は俺を抱き上げた。

子守になれている、と感じるてつきでよしと、おれをあやす。あまりに泣き続けて、少年に迷惑はかけられない。俺は必死に泣き声をおさめようとした。

「うーえっぐ、ひっ」

「いい子、いい子」

「子守になれてんな、カイト」

男がわらうと、“かいと”はちよっとてれくさそうに、でもすこ

しだけかなしそうにしている。

「スラムにいたときはちいさい子の面倒を見ていましたから」

スラムか。“かいと”はもしかして苦勞しているのかもしれない。酎と鈴駆も人間界にある妖怪がすむスラム出身だ。その過去をほがらかに笑い、とくに氣にもとめずにむかしばなしをしたが、それは彼らが妖怪だからで、ふつうの人間のスラムぐらしというのは、並大抵の苦勞ではないだろう。

しみりとしそうな空気を、しかし男は豪快に笑い飛ばす。

「それならいつでも父親になれるな！」

その笑みは、心の底から思っていることを告げていて、一瞬暗い顔をした“かいと”も子供らしく相好をくずして返す。

「父親になるのはまだはやいですよ。俺、まだ十二歳です」

沈んだ空気になるようなものを、あつさりとかえてしまうものを、男は持っている。そういうところは、やはり幽助に似ている。

毒気をぬかれるのとも、その闊達な空気にのまれてしまうのとも違う。男は何処までも自然体で氣取らない。そこにこそやすくなるものが生まれるのかもしれない。

しかし、男の名前は“じん”というのか。

親友とおなじなまえに違和感を覚えて、おれはむうと顔をしかめた。

陣と、同じ“じん”と呼ぶのは、どういうわけかためらいがあった。

名前としては、珍しいものではないから、漢字は違うが音が同じ、というものとは長い生の間は何人もであった。

けれども、この男ほど名前で呼ぶのをためらったことはない。

違和感のほとんどの原因は、幽助と顔がにているせいだろう。それなのに“じん”。顔や雰囲気は幽助っぽいのに“じん”。幽助と陣は、ふたりをあまり知らない第三者からしてみれば、戦うことが好きという共通点と、氣に入ったものに胸襟をひらきどこまでもなつつこい笑みを見せる部分が、よく似ていると感じるかもしれない。

が、おれからしてみれば、その共通点からして微妙にちがう。そして、小さく重なる共通点があるのもわかるからこそ、ふたりのまったく違う部分も目にみえて理解できて、このふたりの性格は似ていない、と結論が出るのだ。

——にているといわれるが、おれからしてみればにいていないふたり。なのに、幽助と似た男は“じん”なのだ。

名前の一致は、ただの偶然なのだがおれは釈然としないものを感じた。どの漢字をつかっているのか、と考えた。まさか同じく陣ではあるまい。もしかした苗字かもしれないしな。気にしても仕方あるまい。

おれが自然と名前につかっている漢字を気にしたのは、彼らが会話につかっているのは、聞きなれた日本語だからだ。

“魔獣”や“念能力者”など、たまに違和感をともなうニュアンスの違うことばがただだけで基本的にことばに関しては、おれのなかの知識とさほど相違ない。

だが、気になることがあるとすれば、“かいと”だ。“かいと”はスラムそだちといった。

おれが知っている日本には、スラムなんてものはない。

いや、ないわけではなかった。でもそれは、裏世界の話だ。人種がいりまじった刺激的な歓楽街の一角にそれらしいものはあった。百年という月日は、妖怪のおれからしてみれば短い、人間にしてみれば長いであろう。世界がかわっても仕方ない長い時間だから、今ではあたりまえのようにおおっぴらに存在しているのかもしれない。

“かいと”は、到底アジア系の顔立ちにはみえない。金色の髪は染めたふうにも見えないし、生来のものなのだろう。ハーフか、ちいさなころから日本でそだって日本語に慣れ親しんでいる白人系ののだろう。

そう、理屈をならべたててもどうにも拭いきれないものがある。

おれは、黄泉のもとでおこなう仕事や、ごくごくまれに赴く人間

界でもしかしたら必要になるかもしれないということで、日本語以外の言語や日本以外の文化知識を一応は習得した（いままで必要としたことは一度としてなかったが）。

どうもこのふたり、使っているのは日本語なのだが、ことばや仕事の端々に日本ではない異文化的なものを感じるのだ。短い時間で、小さなことに目端を気配せるのは忍としての習い性。あかごであってもそのくらいはできる。

これはおかしいぞ、とあれこれと思案しているとき、なれしたしんだ妖気を、遠くに感じ取った。

じんとかいと（後書き）

説明したいことの十分の一も説明できぬまま、蔵馬登場のフラグを
たてさせて次回に続きます。

かんちがいだ。きづいてくれ

森の空気が一瞬でぬりかえられる。強い風もないのに、森中があとをたてた。それに被さるようにけものたちが、本能のままに逃げ出す音を聞く。

おれが蔵馬の妖気を感じ取ると同時に、“じん”の表情がさっと険しいものにかわった。

全身で警戒し、迎撃の構えを取りながら立ちあがる。

ごく自然な動作に見えるのに、一部の隙もない。

その動きに（やはりつよい）……などと感嘆しているばあいではないな。

おそらく、“じん”も蔵馬の妖気に気付いたのだ。

彼はかなりの使い手だ。蔵馬の妖気に気付き、警戒して当然だろう。

凶悪かつ冷たい妖気。

肌にふれるだけで不安を煽る。

おれの妖気が実際に『温度』として冷えているのとは違う、感情や精神にぴりぴりと障る妖気だ。

おれも昔、慣れないうちは、この妖気を感じ取るたびに、警戒してしまっていた。頭では蔵馬のもので敵ではないと理解していても、この妖気を感じるだけで体が萎縮してしまうのだ。

黄泉や軀や雷禅の友人たち、圧倒的強者が纏う妖気に圧されるのとは違う、彼独特の妖気の質。

——せいかくがまるくなっても、ようきの“しつ”はかわらないんだな。

南野秀一の姿をしていたときほどではないが、今の妖弧蔵馬は好戦的で冷酷な性格を大分ひそめている。……敵にたいしてはあいかわらず、容赦のない態度をとるが。……だが、噂で聞く以前の蔵馬よりは、やさしくなったとおもう。むかしを知らないおれには、正

確なことはいえないが。

“じん”は蔵馬の妖気を察知し、敵が近付いていると判断してしまったのだ。

たしかに、なにも知らないものが蔵馬の妖気に触れたら、敵意があると勘違いしてしまうとおれは納得する。

“じん”の尋常ではない様子に、“かいと”も気付きなにかあったのかと不安げな顔をする。

こまった。どうすれば彼が敵ではないとつたえられるだろう。おれはしばし逡巡する。

「カイト、そいつを連れて逃げる。今すぐにだ」

「ジンさん？」

いったいどうしたのだとかいとは聞いたかったのだろう。だが、

“じん”はその問答の時間も惜しいとばかりに遮り、逃げる、と低く潜めた声だが、だが有無をいわせぬ威圧のあるものをふくめて“かいと”に命じた。

緊迫した空気に、幼い表情に覚悟を決めて“かいと”は走りだした。

「うー」

すまん。真剣なところわるいが、彼はおれをむかえにきたおれの仲間なんだ。

と、いつてやりたいのだが、ふたりには真実をいえなかった。

不安や恐怖をまぎらわそうとするためなのか、それとも赤子にされるちいさいおれをけなげに守ろうとしているためなのか、“かいと”は走りながらおれをきつく抱きしめる。

だが、それよりもはやく蔵馬の妖気がどんどん近付いてくる。

その背後で、凶悪な妖気の主の行く手を阻むために、“じん”の霊気が蔵馬の妖気がぶつかった。

かんちがいだ。きづいてくれ（後書き）

一度の更新を千文字にしておけば、スタンダードに更新できるだろうか、と考える。
内容が無いよう

原作から百年たって、南野秀一の寿命は尽きて、常に妖孤姿、という設定でまいます。『いまのところは』

くらまはかおでそんなしているかもしれない

轟音が鳴り響き、背後から粉塵をまきあげ、暴風がおいかけてくる。背中をそれに強く打ちつけられたカイトは、くぐもったちいさな悲鳴をあげた。足をもつれさせ転びそうになったが、寸前のところでバランスをとり、なんとか走りつづける。

ちいさな小枝や、ちぎれた葉が、風に舞い“かいと”を追い抜いていった。

「大丈夫だからな」

じぶんに言いきかせるように、“かいと”はおれを上げます。その必死の強がりも、たった一瞬でうちのめされることになる。足止めのかいなく、戦闘の間もなく気絶させたらしい“じん”を肩にかついで、蔵馬がおれと“かいと”の前にあらわれた。

ととのいすぎて、いっそ冷たさすら感じる容貌。それを助長させる沈着を宿す切れ長の目。

銀色の長い髪。

白磁の肌には白い装束をまとい、耳と尻尾をはやした、人間には異貌にしか見えぬその姿。

いきなり目の前にあらわれた蔵馬に、“かいと”は顔を絶望に真っ青にそめあげ、腰をぬかした。それでもおれを守ろうと、両腕でかくすように抱きしめる。

見ず知らずの赤ん坊のために、ここまで自分のからだをはってまですろうとする“かいと”に言いあらわせぬものがわきあがる。

「ジンさん……」

彼の悲壮なつぶやきをきく。おれはそれに胸がいたくなった。

蔵馬はこどもを傷つけるようなことを好まない。耳の良い蔵馬のことだ。ちいさなつぶやきだったが、しっかりと聞いてしまっただろう。

子供をおびえさせてしまったことに、蔵馬は申し訳なさそうな表

情になった。おれにはそれがわかった。

しかし、蔵馬を知らない第三者には、それはわからなかっただろう。事実、腰をぬかしたまま、“カイト”は後ずさった。

蔵馬の愁傷な感情は、酷薄な表情がよく似合う顔立ちにはひどく似合わず、何故かいびつにみえて、それがむしろ残虐なものを増して見せている。

「怖がらせてすまって悪いな。この男も殺していない、気絶させただけだ。俺はおまえが抱いている赤ん坊をむかえにきたただけだ」

気絶した“じん”を“かいと”の前に丁寧に横たわらせ、“かいと”に恐怖を与えぬよう配慮したのか、蔵馬自ら腕をのばしておれをうけとうとはせず、“かいと”がうごくのを待った。

蔵馬の目に、厳しいものはなく、ただじつと、“かいと”のころをほぐそうとする誠実さがある。

おれは“かいと”に、目の前にいるおとこは恐ろしい敵ではなく、おれを迎えにきた知りあいなのだとすこしでも伝えるために、蔵馬に手をのばした。

「あー」

最初、“かいと”はおれが蔵馬に手をのばそうとするのをはばもうとしたが、たえずのびし続けるちいさな手に、なにか訴えられるものがあつたのか、それとも、蔵馬のことは信じたのか、おれをおそろおそろ蔵馬に渡した。

くらまはかおでそんなしているかもしれない（後書き）

サブタイトルの意味は

文中の

『蔵馬の愁傷な感情は、酷薄な表情がよく似合う顔立ちにはひどく似合わず、何故かいびつにみえて、それがむしろ残虐なものを増して見せている。』

から。

妖狐蔵馬はどんなにこころのなかで、穏やかにこころのそこから優しくしてやろうといつわりなく思っていて、表情ではなにかたくらんでいるように思われる容姿。という設定でいきます。

でも、一緒にいて蔵馬のことを知るにつれ、ちゃんと彼の内心が表情でちゃんとわかるようになっていく。ということで蔵馬をフオロ！。

最初、蔵馬を美しい容姿、といいあらわそうとしましたが、『凍矢はそんなこといわない』と思って削除しました。

くらまはかおでそんなしているかもしれない 2

こどものあたたかい体温をもつうでが、蔵馬にかわる。先ほどまで感じていたこどものあたたかさやわらかさとの違いのせいなのか、おれはどうもいま居る場所が落ち着かなかった。もしくは、単に蔵馬にだっこされているのが違和感の原因なのかもしれない。簡単にいえば、羞恥だ。本当のおれを知らない他人ではなく、成人に成長した自分の知り合いに子供扱い（正確には赤ん坊だが）されているというのは、羞恥以外のなにものでもない。

そのうえ、蔵馬はかつて敵であったが、おれにとって恩人であり、尊敬とまではいかないが一目置いている相手。

居心地の悪さは余計に増した。

「あうー」

わきにかかえるとか、ねこづかみとか……見た目は悪いけれど、おれはそうのほうがおちつくというのが正直なところだ。

だが、要望をいただくのはこらえよう。あれこれと思い煩うのは、わざわざ迎えにきてくれた蔵馬に失礼だからな。

“かいと”を怖がらせてしまったことに、多少蔵馬を責める気持ちが出まわってしまったが、それは理不尽というものだ。蔵馬に悪意のひとかけらもなく、生来からの妖気の質など変えられるものではない。“かいと”が蔵馬におびえてしまったのは誰が悪いことではない。……強いていうとすれば元凶は鈴木だが。

それはともかく、まずは、蔵馬に感謝の気持ちを伝えるべきだろう。

——つたえられないが。

「うーくあーあうー」

すまない、蔵馬。ありがとう。

と、言うつもりがこれである。

精一杯、今できる感謝を伝えようとしたが、赤子の舌はうまくま

わらない。今まであたりまえのようにできたことができないというのは、ひどくもどかしい。

ただありがとうと言葉にするだけのことができない悔しさがうまれる。ことばにならない感情を、体が無意識のうちにあらわして、おれはじたばたと手足を動かして蔵馬のうでのなかで暴れていた。

「どうした凍矢？」

——なんでもない、すこしうるさかったかもしれないな。すまない。声にならないので、今度は眼で訴える手段をとることにした。

むしろそれしかない。なぜ、今まで考え付かなかったんだろう。

蔵馬は聡い。おれのいいたいことくらい、わかってくれるだろう。おれは蔵馬の灰色の瞳をじいつと見つめる。

「その子、名前はトーヤっていうんですね。何かいいたそうですね。れど、おながが空いているんでしょうか」

「さあな……。そうなのか？ 凍矢」

からかうような視線をおれにおとした。違うとわかっていて、わざと訊いているのだろう。

「うー」

まったくちがう。おれはできる範囲で首をふった。

おれの仕草に、“かいと”は目を見張った。

「トーヤはもしかして、俺たちのいつていることばがわかるんですか？」

意志の疎通がはかれることに、“かいと”は驚いていた。

くらまはかおでそんなしているかもしれない 2（後書き）

やっとカイトが凍矢の名前をしりました。

次は蔵馬の自己紹介。

このまま気絶したジンと子供のカイトを放っておくことは危ないだろうと蔵馬は判断して、まだ元の世界に戻るつもりはありません。だからのんびりカイトとはなしています。

それを、ちゃんと本文で書かないとだめですね。次に挿入しておきます。

くらまはかおでそんなしているかもしれない 3

蔵馬は愉快そうにわらう。

「まあ、普通の赤ん坊ではないからな」

蔵馬の要領を得ないこたえに、“かいと”は首をかしげる。まさか、本来の姿は二百歳の妖怪だとはおもうまい。

“かいと”が問いを重ねようとしたところで、“じん”のうめき声があがり、おれたち三人の視線がそちらにむかった。

彼は目を覚ますや否や、

「くっそーやられた！」

声を張り上げて、上半身を勢いよく起きあげた。顔はことばのとおりに、手も足も出ずに蔵馬に敗北したことを悔しがる表情。本音をいつわらないそのすがたは、屈託のない少年のようだ。

「その様子だと、大丈夫そうだな。気分の悪さが残るようなら薬をつくろうかと思ったが」

つくづく蔵馬は本音が表面に出にくい男だ。

“じん”を蔵馬は面白がっている態度だった。声音の素っ気なさから、“じん”に対して興味などない冷淡な態をしているが、ほんの短いやりとりしかしていない彼を気にいったことを感じ取った。

「おまえ！」

“じん”は蔵馬を見て、叫ぶ。蔵馬の妖気は相変わらずだが、殺されもせず大きな怪我也負わされていないことから、瞬時に蔵馬に敵意がないことを悟ったのだらう。殺意や切羽詰まった緊張感が今の“じん”にない。覚醒の直後に、説明もされずにそこまで理解できるなど、たいしたものだ。

「凍矢を保護してくれたことを感謝する。仲間の恩人に手荒な真似をしたことは謝っておこう」

蔵馬は淡々と言った。

「ああ、そいつを迎えにきたのか。敵かどうか確認しないで、俺も

いきなり攻撃して悪かったな」

“じん”も突然の非礼を詫び、

「それで、だ。もう一回手合わせ願いてえんだが」

そして、立ちあがってすぐに再戦を申し込んだ。自分を打ち負かした相手に、負けっぱなしは嫌である。これにはおれも同意だ。

そして“じん”の目はかがやいている。強い相手を戦う楽しみに、こころを踊らせ、全身にちからをみなぎらせていた。よどみない靈気が、“じん”の周囲を隈なく覆っている。鍛錬に鍛錬を重ねた、精錬されたそれは、とてもうつくしい。

“かいと”はそんな口のはさむ隙のないやりとりを呆然とながめている。それは、おれも同じだが。

「やめておけ。相手にならない。俺と戦いたければ、もっと鍛えるといい」

一笑に伏して、“じん”の頼みを切り捨てた。

圧倒的に蔵馬が勝り、勝負にならないのはさきほどの衝突で明白。挑戦的な物言いは、棘よりも鋭い刃に近い。元より蔵馬のもつ冷酷な雰囲気に加わり、一色触発の剣呑な空気が周囲に重くたちこめる。哀れ“かいと”はそれに呑みこまれ、必死に悲鳴を呑み込んでいる。

そんななかで、“じん”は冗談っぽく舌打ちし、肩をすくめた。それだけで、この場の主導権が“じん”にうつってしまったような気がして、その不思議な存在感におれも蔵馬も“かいと”も意図せずして彼に注意がいく。

「わかった。出なおすさ。だがな、次に挑む時は絶対に勝つからな」

“じん”は好戦的に笑った。

「そういえば、名乗ってなかったな。俺はジン。こっちがカイトだ」
たしかに、互いの自己紹介もほったままだった。おれは三人の名前を知っているから、すっかりそのことが頭から抜け落ちていた。
「……蔵馬だ」

銀色の髪を、微風にゆらしながら蔵馬はこたえた。

それはどういうことだ！

互いの自己紹介を終え、話にひと段落つく。それを見計らったようなタイミングで、蔵馬の携帯電話の着信音が鳴った。

元社会人らしいちいさな気配りが出て蔵馬はひとこと断ってから、蔵馬はその電話に出た。

話の内容はよく聞こえないが、電話の相手は声からして鈴木だ。電話の向こうで能天気語っているのが分かる声に、おれのなかで苛立ちが増幅していく。そもそもこのような姿になり、蔵馬や“じん”や“かいと”をわずらわせてしまったそもその元凶は鈴木なのだ。戻ったら、即、手加減一切なしの全力をこめた魔笛散弾射だ。鈴木のことだ、死にはしないだろう。念のため、この赤子の姿を戻す薬をもらってから攻撃をしかけたほうがいいか？

「ああ、無事見つけた」

おれを発見して確保した報告か。よかった。これで帰れるのだろう。鈴木 of 発明を使うのか、魔界に戻る入口が何処かにあってそれを使うのかわからないが、方法などこの際構わない。要は帰還できればいいのだ。

「……なに？ それは本当か？」

安堵していると、それを打ち消し不安にさせる不穏な流れになっていく。おれは不安を隠せない表情で蔵馬を見あげた。蔵馬の苛立ちが険しく引き締められた唇や、僅かに皺をよせた眉間から察せられる。殺気が、じわりじわりと漏れていて、凶悪な妖気とまざりあい、おそろしく禍々しい妖気が渦巻いていた。まるで、魔界の空気 of 最も嫌なところを凝縮したような性質の極悪さだ。肌にふれるだけで、ひとを傷つける意思があるような凶暴性と、精神にまで滲みわたり畏怖させる無慈悲な陰惨さがある。

その渦中の居心地の悪さといったらない。

反射的に臨戦態勢にはいり、蔵馬のうでのなかで妖気をまとって

しまう。

迎撃の準備などしなくても、蔵馬は俺を攻撃してくるはずがない。だが、わかっていても、長年体に染み込んだ戦士の条件反射は消えるものではなく、脂汗をにじませて蔵馬の次の行動を必死にうかがう。

「……ち。鈴木、貴様、戻ったらただですむと思うなよ」

蔵馬は乱暴に通話を切った。

その瞬間、たちこめていた重苦しい妖気が些かましになり、蔵馬以外のおれをふくめた三人は、ようやくひと心地ついた。

澀んでしまった肺のなかの空気を吐き出すように、“かいと”と

“じん”のふたりはおおきく息を吐いた。

蔵馬の不機嫌に罪のないふたりを巻き込んだことを謝罪することはなく、彼ははっきりと俺に告げた。

「凍矢、しばらく帰れなくなったぞ」

蔵馬のことばが、一瞬理解出来ず……否正確には理解することをおぼんで、おれはおおきく目をまるめ、おどろきのまま表情を固めた。その間にもじわじわと蔵馬のことばが脳内に浸透していき、その意味をゆつくりと咀嚼し、ようやく理解した。

「うあーーーーーん！」

帰れなくなったとは、どういうことだ！

それはどういうことだ！ 2

「なにかトラブルでもあったのか？」

額に滲んだ汗を服の裾で拭いて、“じん”が尋ねた。

「まあ、な」

思案しているのか、その問いに蔵馬はいささかぞんざいな返事をする。

伶俐な顔立ちで考える姿はさまになっているが、同時に他者の干渉を拒む冷たさを放っている。

「ふうん。手伝えることがあったら、手を貸すけどよ。どうする？」

それを全く気になけず、そんなもの最初からないようなおおらかな態度で接するのが“じん”という男だった。さつきまでは蔵馬の“本物の殺意”に圧倒されていたというのに、それを気にしている様子はない。おれはその大物ぶりに素直に感心する。

自分を飾らない極々自然な笑みを浮かべている。

無用な警戒心を持たず、相手の緊張を解くような安心感が、力強い笑みにある。

そんな“じん”に毒気を抜かれたのか、蔵馬は唇に笑みを刻み、力を抜いた。それによって途端に気安くなるわけでもないが、思わず身構えなくなるような空気が蔵馬から消え失せた。

「そうだな。このままでは凍矢がかわいそうだからな。近くにベビー用品店があったら案内してもらいたい」

蔵馬……それは、この場を盛り上げる冗談のたぐいであって、決して本気ではないよな？

おれはこころのなかで蔵馬に語りかけた。

「ベビー用品……」

“カイト”が反芻してつぶやいた。そう、言ってしまうお前の気持ち、俺はなんとなくだが想像がつく。蔵馬のような容姿の持ち主から、ベビー用品などという単語が口からでてくると違和感がうま

れる。それは不快なものではなく、ちょっと笑いだしたくなるものだ。

「ベビー用品店なあ。ここから一番近くにある店っていうと……あそこにある店だな、よし、案内してやるからついてこい」

「悪いな」

「カイトもついて来い。ここにひとりでいるのは危ないからな」

「わかりました……ジンさん。もしかして店まで徒歩で行くつもりですか？」

「あたりまえだろ。それ以外になにか移動手段なんてねーだろ？」

“じん”が快活に笑うと、“かいと”は天をあおいだ。

「なあに途方に暮れた顔になってんだよ。ちょっと遠いけど、歩いていけない距離じゃねえ」

「徒歩でまる一日かかる距離は、ちょっと遠いどころじゃないと思います」

“じん”の感覚に呆れをこめて“かいと”はつつこみをいれた。

おれからしてみれば、歩いて一日の距離は『ちょっと遠い』だな。全力で走れば、すぐに目的地にたどりつける。ふつうの子供の“かいと”からしてみれば、自分で歩くとなればかなり遠い距離になるのは常識として知っているが。

それはどういうことだ！ 3

恐ろしいことにおれたち四人は、本気で一路ベビー用品が売っている店をめざしている。

おれは蔵馬に抱きかかえられたまま、それに戦慄していた。頭の中が真っ白になり、あらぬ予感にからだ冷えていくようだ。

まさか、まさか、まさか。

抗議のことばがでない。抵抗のために暴れたところで、元の姿でも蔵馬には勝てないというのに、非力な赤子の腕力でおれが彼に逆らえるはずがない。

打開策がおもいかばず、おなじ言葉が脳内に巡る。

いまのおれは裸同然で、たしかに情けないかつこうだが、ベビー用の衣服を着るのはそれ以上にためらいがある。そんなものを身につけさせられたら、成人男性としての自尊心がいちじるしく侵害される。

いますぐ、薬の効果が切れて、もとのすがたに戻らないだろうか。おれは掛け値なしに願った。

いま、もとの姿に戻ったらかなり具合の悪いものをさらすことになるが、おむつやら乳児サイズの服を着るよりもはるかにましだ。

「うあー」

この薬の効果時間がどれだけあるのだ？

一時間……はとづくにすぎている。もう、三時間くらいはたっているな。

半日、一日？ まさか一週間ではあるまい……

鬱々と考えこんでいると、蔵馬はあきらめろ、とでもいうようにおれにむけて静かに首をふった。わずかにふくまれる、眼差しの哀れみは一体なんだというのだ。

悪い予感ばかりが、おれのなかにうまれる。

それは、おれの懸案をさとしての返答ではないだろう？ そうだ

ろう？

それは逃避の懇願にしかすぎないのだろう。無意味に希望をかさねたところで真実はかわらない。だが、むだとわかっていても、ひとはねがわずにはいられないのだ。

「その薬は、鈴木で作った解毒剤を飲まないと効果が消えないと聞いた」

蔵馬はきっぱりと告げた。

——そんなきはしていた。だが、鈴木からげどくざいをあずかっているかのうせいもある。

おれは僅かにのこされた希みにすぎる。

「そして、魔界に帰ったらその薬を凍矢に飲ませるつもりだったから、悪いが解毒剤を預かっていない」

蔵馬は淡々とたたみかける。

——蔵馬ならば、げどくざいをつくれるはずだ。蔵馬のといふんやだろつ。

落胆するにはまだはやいはずだ。

「鈴木 of 薬は厄介でな。大体、一見して俺の手に負えるものか負えないものか判断できるが、残念だが凍矢の薬は後者だ」

つきつけられた現実 is、無情だった。

「凍矢、かなりぐったりしているみてえだけど、大丈夫なのか？」

「泣きわめいて疲れただけだろつ。心配しないでいい」

いせかいとかなんのじょうだんだ 1

「なあ、蔵馬。お前はなんの種類の魔獣なんだ？」

周囲の音を拾ってはぴくぴくとうごく耳や、毛艶のいい長尾は見る者の目を引く。

人里が近付いてきたら、ひとのめにつかぬように見えないように隠すだろうが、いまはそのままの姿をしている。

“じん”は興味深そうにそれを見ている。

「こちらでは俺のような異貌を魔獣と呼ぶのか」

はじめてしる事実を確認するように、なるほど、と静かにうなづく蔵馬。

「蔵馬さんのところでは違う言い方があるんですか？」

“かいと”はふしぎそうにたずねた。

「妖怪と呼ばれているな。もしくは魔族」

本来の姿をあらわしている蔵馬は、いつわりなくこたえた。

それにしても、人間界に来ているというのに、蔵馬は本当に堂々としている。

魔界の存在が完全に人間に認知されているわけでもないのに。なぜ、蔵馬は正体をかくしてこなかったのだろう？あとで、記憶を消すつもりなのだろうか。耳としっぽくらい、妖気を使って人間に見えないようするのは簡単だとおもうのだが。

そういえば、ふたりはあきらかに人間とは違う容姿の蔵馬を見ても、おどろいていないことに、おれは気づいた。

魔獣、という存在として、あっさりと彼をうけいれている。

おれのように、髪の色がめずらしいだけで人間と見た目だけならほぼかわらない存在を見ても、おどろかないのならまだわかるのだが。

「妖怪っていうと……もしかしてジャポンあたりの出身か？」

ジャポン？ジャパンをなまって発音したのか？いや、そもそも

もここは日本ではないのか？ 日本にいるのに日本が出身地なのか、と聞くのはおかしいだろう。と、考えるとここは日本ではない。日本ではないが、彼らは日本語を使用している。さて、日本語をつかっている時点で、日本出身と簡単に推測できるのではないか？

「ジャポン……ここには、そういう名の国があるのか」

返す蔵馬の科白も不可解だ。

なにが？ と問われると、まるでよく知らない場所のように『ここには』などということばをつかったことだ。

「それにしても、ここにも妖怪はいるんだな」

「妖怪がいるつつーか、昔、ジャポンは魔獣の何種類かを『妖怪』とよんでいたんだ。そういう文化があった。いまはジャポンでも、

『人語を解する獣』は魔獣とよんでいる」

へえ、と“かいと”は初めて知る知識に聞き入っている。

……ようするに、おれが最初に推察したとおり、妖怪は魔獣とよばれるようになり、そのうえその存在はあたりまえのように広く知れ渡っている、と。

じぶんのしっている知識と推測がひどく齟齬がしうじて、思考がまとまらない。

いせかいとかなんのじょうだんだ 1 (後書き)

わたしも説明したいことと、実際に文になることばが齟齬が生じてうまくまとまらないよ。

いせかいとはなんのじょうだんだ 2

「凍矢でも熱をだすんだな」

淡泊な蔵馬のことばに、おれもどういした。

——おれでも、ねつをだすのか。

体調を崩すなど、じぶんとはほどとおいものとして捉えていたからだ。記憶にある限りでは、病気にかかって苦しんだ経験など一度もない。

単純な身体能力だけではなく、病気に対する抵抗力もだいぶ落ちていたらしい。

おれは、いろいろと考え込んで悩んでいるうちに、眠気とは違うあたまがぼうつとするものに徐々に蝕まれていつて、いつの間にか気を失っていた。

最初に、おれの異変に気付いたのは“かいと”だったと聞いた。子守になれていると言っていたのは伊達ではない。どうやらずいぶんと悪い顔色になっていたらしい。声をかけても反応がなく、見た目が赤ん坊なだけに、ずいぶんと“かいと”と“じん”はあわてたそうだ。

蔵馬は落ち着いて薬を処方したらしい。それをきいてやはり蔵馬だと感心した。

「意識がないせいで、薬を飲ませられずに難儀した」

それは、めんどろをかけたな。

いま、おれは静かな部屋で蔵馬とともにふたりきりでいる。どこからか借りてきたのか、それとも恐ろしいことがおれの意識がないうちに実現し、ベビー用品を買ってきたのか、柵のついた子供用のちいさなベットに寝かされている。

ここがどこなのかは、知らない。ホテルの一室のようには見えないし、病院特有の薬臭さやしんとした空気を感じない。天井の高さ

や部屋のまどりから一般的な住宅の一室にみえたが、どこかさびしくさびれている。久しくひとがすむことを忘れていたような部屋だ。生活感に欠けている雰囲気がある。そこに急遽生活物資をもちこんだように見えた。必要なものだけおかれた家具が、かえって部屋を殺風景に見せている。

蔵馬は横になっていたおれを起きあがらせて、スプーンにすくったどろりとした粘液状の薬を口元にはこんだ。蔵馬のつくる薬というのは、とてつもなく苦くて毒のように、むしろ毒よりも不味いものという先入観がおれのなかにあったが、意外にもそれは口当たりがよく、難なくのみこめた。

「熱は一端下がったが、以前とは違い大分抵抗力が落ちているようだ。気をつけたほうがいい」

裸に近いままの状態にされていたことが、体調不良の原因だろうか。それが原因だったら、おれじしんがどうやって気をつけられないのかわからないのだが。身動きがじぶんの意思でとれないからな。しかし、蔵馬にいわれたからにはできる限りのことをするしかない。がんばるか。

「凍矢、見た目は赤ん坊になったが、意識はそのままなのだろう？」
蔵馬の問いに、おれはこくんとうなずいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9043s/>

とーやくんとくらまおにーさんがハンター世界へ

2011年9月20日03時21分発行